

「ニューノーマル」

日本赤十字社診療放射線技師会 会長 正者 智昭

2019 年末に発生が報告された新型コロナウイルス感染症は、感染の拡大と減少を繰り返しながら 3 年目を迎えています。現在オミクロン株の感染拡大による第 6 波はピークを越えたもののその減少スピードは緩やかで、感染者が減りきる前に変異ウイルスへの置き換わり等によって再び感染者が増加傾向に転じる可能性もあり、引き続き先を見通せない状況に変わりはありません。発生した当初は一時的な異常事態と思った方も（私も含めて）多かったと思いますが、ここまで長引き先が見えない状況が続く中、コロナ禍の前と現在では社会の常識が変わってしまいました。日常生活では、ソーシャルディスタンスを保ち「密」を回避する、マスクの着用、手指衛生の徹底などが常態となり、また政府が 2020 年に発表した新しい生活様式の働き方においてはテレワークが推奨され、それに伴い会議や研修もオンラインで行われることが多くなったことは周知の事実です。特に仕事におけるオンラインの活用については、以前から言われていたもののなかなか浸透しませんでした。コロナ禍によって進めざるを得なくなり、しかし実際に導入してみるとその効果が十分に認められ新しい働き方として受け入れられました。これらの常識や行動の変化は第 3 のニューノーマルと呼ばれています。我々診療放射線技師の身近なところでは、感染予防策についての知識や技術の習得はコロナ禍前と比較すると大きく進み、放射線診療では明らかな感染患者への対応はもちろんですが、日常業務においても常に「感染」を意識して実践されるようになったこともニューノーマルとして挙げられるでしょうか。

そして偶然ではありますが、タイミングを同じくして法令改正による診療放射線技師の業務範囲が拡大され取り組みが始まっており、これはまさしく診療放射線技師における最大のニューノーマルです。取り組みに対する考え方は様々であり課題もたくさんあるとは思いますが、任された仕事に責任をもって対応し成果出すことは診療放射線技師の信頼に大いにつながるものと考えます。しかし、個人的に少し気になるのは平成 22 年の厚生労働省医政局通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について明示されている「画像診断における読影の補助を行うこと」「放射線検査等に関する説明・相談を行うこと」について現在どこまで達成できているのかということです。熱意をもって取り組んでいる方やご施設も当然あるとは思いますが、診療放射線技師全体として、あるいは各々の組織としてどれだけチーム医療として貢献できているのでしょうか。今から 10 年以上も前に示された取り組みで今更の感もあり、また評価することは難しいと思いますが、以前から、そしてこれからも診療放射線技師として必要なスキルを包括している重要な事項として、いま一度を振り返ることも必要な事ではないかと考えます。我々は与えられたタスクを実行できているのか、良質な医療の提供に貢献できたのか、課題は何だったか等を検証した上で、これからどのように医療に関わり医療に貢献していくか各々が考え、思い描き、そしてそれらが結集したときに、ニューノーマルというほど劇的な変化では無いにせよ、これからの時代に向けた新しい診療放射線技師像が見えてくるのではないかと期待いたします。